

ガンダーラ法句經に見る婆羅門と仏教

玉 井 達 士

1. Gāndhārī Dhammapada 写本（以下 GDhp）の概要

GDhp は1892年 Khotan 近郊 Gośrīnga 牛角山 (?) で Dutreuil de Rhins 並びに Grenard により発見されたと言われるが、Stein の現地調査 (*Ancient Khotan*, p. 188) にも関わらず、出土場所は不明である (Brough 1962 p. 2)。以下にその当時の中央アジア出土の写本の状況を概観して GDhp を含めた埋蔵文化財の運命を見てみたい。

1888年に中国清朝、ロシア、英国の権力争いが有った中央アジアで起こった殺人事件の犯人探しを命ぜられた英国インド軍の大尉 Bauer が偶然、クチャ近郊のシャル河左岸の廢墟（仏塔跡？）で一束の樺皮に書かれた古文書を現地人から購入したことがきっかけになり、中央アジア・シルクロードの埋蔵文化財の発掘ブームが勃発した。因みにこの文書はサンスクリット語で書かれた薬草などの効用を記した医学書で、現在は英国 Oxford の Bodleian 図書館に Bauer Collection として保存されている。

同じ所から出土した Tocharian ‘トハラ語’ で書かれた同種の医学書は1896年にカシュガルの英国領事 Macartney が入手して Hoernle に手渡された。Broomhead により間違って Weber Mss. 1~42とされたが、この内 ff 1~12並びに ff 30~42は元々レーで病院を運営していたモラヴィア教団の神父 Weber が購入したもので、Hoernle が個人的に買い取り Bodleian 図書館に売却したものである。ff 13~29は Macartney によりインド政府に売却され、第二次世界大戦後に大英博物館に移送され Or.6402A/1並びに Or.6402A/2として保管されている。筆者はこの泣き別れになったトハラ語写本を以前入手した写真をもとに、Oxford の Bodleian 図書館で実見してから、Filliozat 1948の不正確さを正すべく論文を書いて Academia に発表した。

この様に政治的には中・露・英による Great Game と呼ばれていた現象が、埋蔵文化財の争奪合戦、所謂 Central Asian Fever に発展し、実際ドイツ隊の様に現地で発掘した文物以外は出土地・出土状況は不明である。即ち出土文物が売れると言う事で現地の人々が盗掘をして売却したり、時には模造品も含めて市場に出回る事になった。GDhp の発見もこの産物であると思われる。同じ GDhp の別の箇所をロシア国駐カシュガル領事の Petrovskii も入手しているところから見ても、発掘により入手されたものではなく、売買されたものと思われる。私見では紀元後2-3世紀のガンダーラ仏教文献がタクラマカン砂漠から出土していないのでアフガニ

スタン東部或いはパキスタン北部で出土したものがコータンで売買されたもので、“Khotan Dharmapada”として紹介され（e.g. H.W. Bailey, BSOAS Vol.11, No.3 pp. 488-512）コータンの古語として扱われた。

前述の様に GDhp の一部は Dutreuil de Rhins と Grenard が入手して1897年 Senart に届けられ、他の部分は Kashgar の Petrovskii により St. Petersburg の Oldenburg に届けられた。

Oldenburg は一葉（“O” in Brough 1962 line 0-30）の写真とローマ字転写を『カローシュティー文字で書かれた仏教写本に関する予備的紹介』として St. Petersburg 大学・オリエント学科より Paris で開催された第11回国際東洋学会議に提示した。

一方 Senart は同会議に Dutreuil de Rhins の写本に関して報告をするとともに1898年に5葉（“A”, “B”, “C” in Brough 1962）と彼の転写・解釈を Journal Asiatique に発表した。その際、Oldenburg は Senart に St. Petersburg 写本を提供したが、Senart はそれに関して少しの記述をしたのみで、出版その他は Oldenburg に任された。しかしその後 Oldenburg からの公表はなかった。

この様に GDhp の St. Petersburg 写本は埋もれてしまい、Senart の発表した Dutreuil de Rhins の写本のみが50年以上に亘り学者に利用された。Konow の写真入手の努力にも関わらず研究者達は St. Petersburg 写本を使えなかった。例えば Lüders, Franke, Bloch, Barua / Mitra の GDhp 研究や Pischel, Lévi, de la Vallée Poussin, Chakravarti の *Udānavarga* 研究、或いは Burrow の Niya Prākṛit 研究（*The Dialectical Position of the Niya Prākṛit*, BSOS VIII 1935-37）などである。筆者はパリ国立図書館で GDhp を実見したが、箱の中で固定されていない写本が動いていた様で、破片になっていたものもあった。

こうして GDhp に関して誤った読みが依然として残り、Gāndhārī の言語に関する明確な概念は得られなかった。そこでコータン語の研究者の Bailey は中期インドの方言の重要性を認めて、得られる限りの GDhp の資料（上記の “A”, “B”, “C”, “O”）の正確な読みと語彙を学界に提供した（*The Khotan Dhammapada* in: BSOAS XI, 1943-46, pp.488-512）。

その後15年を経て Brough は St. Petersburg 写本の残余 “M”, “N” の写真を得て全体の8分の5を回復したが、残りの8分の3（Pāpa, Arhant, Citta, Bāla, Nāga, Aśva の各章 § 23~26）は行方不明で発見される可能性は絶望に近い。しかしながらその出版（Brough 1962）により GDhp の全体構造が分かり大変意義深いものである。

Gāndhārī という呼称は Bailey が Gāndhāra に feminine suffix -ī を付けて作ったものだが、本人は正確なものではないと言っていた。しかしその後普遍的に使われている。

書写された文字は Kharoṣṭhī と呼ばれるが、語源は Bailey に依ると Hebrew ヘブライ語の *kharosheth* “a Semitic word for writing” 又は Old Iranian 古代イラン語の *xšaθra-pištira “royal writing”（*A Half-Century of Irano-Indian Studies* in JRAS, Vol 104,2, 1972, pp. 103）と

なる。他に *khara-oṣṭha* “ロバの唇”（インド人にとって何を言っているのか分からない言語？）などの語源 ‘nirukti’ が考えられている。

文章・単語は右から左に向かって書かれるが、渦巻き状に書かれたものもある。母音は長短の区別がなく（短母音のみ）/a, i, u, e, o/ は当時インドで使われていた Prākṛit, Skt. の母音以外、無作為に交替する。この母音のない形態は子音3文字で構成されるアッカド語等のセム語系で *lingua franca* として広範囲で使用されていた右から左に向かって書かれたアラム語の特徴を示すものと思われる。もしこれが当たっているなら Gāndhāri はインドの Prākṛit 俗語ではなくイラン系の人達（？）がインドの母音が不可欠な Prākṛit を写したものと言う可能性がある。

2. GDhp の書写された時期（紀元後2－3世紀？）の状況

GDhp の始めの第1章は他の Dharmapada ‘法句経’ と異なり Brāhmaṇa ‘バラモン’ で、偈 ‘verse’ の数も他の章と比べて最大の50を数える。この事から分かる様に紀元前後の原始仏教から初期大乘仏教に移行する時期に書写された GDhp において Brāhmaṇa ‘バラモン’ の重要性が理解される。

岩本裕（中公新書32佛教入門134－5頁）に依ると Pāli AN I, 14 = 増壹阿含経 III, 4～7にある佛弟子の名前から比丘の出身を見ると他のカーストに比べ圧倒的にバラモンの数が多く（各々56%、58%）、また *Sumāgadhāvadāna* の十九大弟子も58%がバラモン出身である。

Brahmins might become Buddhists (brahmanical buddhist authors, e.g. Aśvagoṣa and Mātṛceṭa, (Bronkhorst p.185: Nāgārjuna and Vasubandhu, grammarian Candragomin), but Buddhists could not become Brahmins unless they were already Brahmins. (Bronkhorst: p.183)

この事から分かる様にバラモンは神官としてだけでなく当時の知識階級であり、一般社会でも文化の推進役を担っていた。また宮廷でもイランの *magos* (Herodotos I-132) やガリアの *druides* (Caesar, Bello Gallico VI-13) と同じ様に権勢を振るい、立法・行政・司法に大きな影響力を持っていた。佛教教団もバラモンの社会的権勢や文化は無視できず、GDhp が書かれた頃はこの様子を反映している。

私見では Gāndhāri 写本は Skt. と中期インド語に基づく前期と、より Skt. に近づく後期に分けられ、初期の漢訳仏典において音写が認められるのは前期の Gāndhāri のもので、その古文書学・文献学に基づく研究は所謂初期大乘仏教史並びに中央アジア仏教史に多大なる寄与が期待されるだけでなくインド仏教と中央アジア仏教の関係を探る重要なものになる。

当初 Prākṛti はインド宮廷では公式言語で、Skt. ‘サンスクリット’ はバラモンの言語であったが、紀元後1－2世紀位から西北インドの仏教徒は Aśvagoṣa の様に Skt. を学問的言語として使う様になった (Bronkhorst: p. 131)。その後 Skt. でバラモン思想 *trivarga*: virtue

(*dharma*), wealth (*artha*), and desire (*kāma*) が Āryaśūra's Jātakamālā や Mātṛceṭa's Varṇārhavarṇastotra に見られる (Bronkhorst p. 173)。Yoga (in Mahābhārata) の第一段階に reflection (*vicāra*) と deliberation (*vitarka*), また joy (*sukha*) など仏教と同じ様に見られる。この事から分かる様に Brahmanism 'バラモン教' が Buddhism '仏教' に少なからず影響を与えた。

以下、GDhp の導入部 (Prologue or Introduction) Line 0 のテキスト (左) と筆者の英語の私訳 (右) を付け、同様に第一章 Brāhmaṇa にもテキスト・英訳をつけ言語学見地から問題点を検証して行きたい。

Line No.0 (Prologue or Introduction 端作)

budhavammaṣa ṣamaṇasa	A monk Buddhavarman ('scribe' gen.sub.),
budhaṇādi-sadhavayārisa	a pupil (<i>sārdhavihārin</i>) of Buddhaṇādi
ida dhammapadasa postaka	has written (<i>likhita</i>) this book of Dharmapāda
dhammuyāṇe likhida araṇi	in the <i>Dharma-Udyāna</i> -Temple (法園寺?)

問題は1行目2行目にある genitive 属格 -sa の機能と4行目の past participle 過去分詞 *likhida* が passive 受動的か active 能動的かと言う事である。以下、この問題に関連する種々の著述を参照して検証してみる。

"the name of a monk (*ṣamaṇa*) in the genitive, which Brough takes in its literal sense as indicating ownership of the manuscript. However, since the verse lacks a word in the instrumental to supply the expressed agent of the participial main verb *likhida*, 'was written' it seems reasonable to understand the genitive phrase as indicating that the monk Buddhavarman wrote it. This interpretation can be justified on technical grounds, the agentive use of the genitive with participial forms in Gāndhāri is well attested, especially in the central Asian documents, where it is 'almost exclusively used for expressing the agent with passives, i.e. the participle in -*taḡa*'. (genitive form) gives us the name of the scribe, rather than the owner, strictly speaking of the scroll." (Salomon 1999: p.41)

Salomon に依ると *likhida* を「受動的 passive」と見ているが genitive 属格で表される人物を agent 行為者・動作主としている。*likhida* が受動的 passive であれば GDhp には instrumental 具格が有るのに使われていないし、GDhp では genitive 属格に instrumental 具格の機能は認められ無いので矛盾がある。即ち genitive 属格が agent 行為者・動作主を表すのであれば *likhida* は能動的 active でなければならない (下部参照)。

トハラ語などの中央アジアの言語では準動詞 (infinitive '不定詞', participle '分詞', gerund '動名詞') に対する genitive '属格' は subject '主語', object '目的語', dative '与格' など多様な働きを示す。

ラテン語の人称代名詞では genitive 属格は補語や目的を表す。

古代ギリシャ語では genitive 属格は知覚動詞の目的語になる。

これらの事からも分かるように genitive 属格の機能は一般的な「所有」のみではなく言語にも依るが多機能を持つ。因みにトハラ語では genitive 属格だけが印欧語の case 格になるが、他の case 格の働きは oblique 斜格に adverb 副詞や post-position 後置詞で表される。即ちアーリア系（或いはイラン系）と同じ様に oblique language である。

次に印欧比較言語学の観点から、述語の過去分詞 *likhida* が「能動的」か「受動的」かという問題に関して検証してみたい。

“In der späteren Sprachgeschichte besteht die Tendenz, die Bildung auf passivischen Gebrauch zu beschränken wie in nhd. *gelobt* ‘erlaubt’, lat. *amātus laudātus*. ... A.ind. *gatas* ‘er ging’, *prāptas* ‘er erreichte’ ... die -to- Bildung regelmäßig von aktiver Bedeutung usw.”. (Szemerényi, *Einführung in die Vergleichende Sprachwissenschaft*. p.352)

“Bei den 3. Personen kann statt des Nominativs auch ein partitiver Gen. das Subjekt bilden”. (Brugmann, *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*: p.626)

“-ta- dient oft zum Ersatz für ein Vb. fin.”. (Wackernagel, *Altindische Grammatik* Band II,2 *Die Nominalsuffixe* von A. Debrunner § 434)

“The subjective genitive is interchangeable with the instrumental of agent (§ 66). According to Pāṇini, the latter is necessary, if the verbal noun be attended by its subject and its object at the same time”. (Speijer, *Sanskrit Syntax* § 114)

ラテン語において gerundive ‘動詞状形容詞’ は一般的には受動的であるが、sequor ‘to follow’ の gerundive ‘動詞状形容詞’ “secundus” が示すように、元来は受動的ではなく能動的である。またサンスクリットの *Avalokiteśvara* 「観音菩薩」の *lokita* も能動的作用を持つ。

これらを参照して言語学的に考証し、また用例の内容を吟味した結果、印欧比較言語学では -to adjective (接尾辞 -to) と呼ばれ、Veda にもある様に能動的な働きをもつ past participle ‘過去分詞’ が存在したが、Pāṇini 以降に人工的に規定されたサンスクリット語では主に受動的な用法に変わったと考えられる。それ故この *likhida* も筆者は、過去に起こり現在の状態を表す能動的な働きを持つ past participle ‘過去分詞’ と考える。

Gādhārī の -sa は Skt. の属格 -/sya/ で 1 – 2 行目は同格である。上記 Salomon の記述の様に、過去分詞 *likhida* の行為者・動作主 *budhavamma* と彼の属性を表しているが、3 行目は *postaka* ‘book’ (*likhida* の目的語 ‘accusative’, Skt. *idaṃ postakaṃ*) にかかる同格である。もし *likhida* が受動的であれば本が *budhavamma* 個人の所有になるが、ガンダーラの僧院内で個人所有の物が出土していない事や、トハラ文献の中に本を束ねる木製のカバーの裏に『この本は僧院で良く保管すべき』から見ても書籍は僧院の持ち物で、個人所有ではないと思われる。ま

た由来を表す奥書の書式から見て著者の名前や寄進者の名前は出て来るが、所有者の名前が出て来る事は考え難い。

dhammuyaṇe は所格 'locative' で *araṇi* と同格である。この語を Dharmaguptaka (cf. Brough 1962, p. 44 ft. 3) とか、上記の *budhavamma* 属格 'genitive' を「本」に結びつけ、*likhida* を受動的にする為に具格 Dharmāsraveṇa にする (Baums 2014, cf. Strauch 2014 p. 812) 等、都合良く曲解するのは受け入れられない。

3. dhamma < dharma について

私見ではこのガンダーラ法句経は前期のもので後期のように Skt. をより忠実に表記しているのではなく Prākṛit に基づいている。従って Skt. の *rma* や *rdha* は gemination (double consonant) *mma* か /r/ が削除された *dha* になる。GDhp では表記された akṣara '文字' の縦線に横線が横断しているのを伝統的に -r- と読まれている。例えば *sarva* の *r* は *v* の縦棒の下の部分に横線が書かれているが不自然である (/vr/?).

中央アジアで使われた Brāhmī 文字や GDhp より 2～3 世紀後のトハラ語で使われた Brāhmī 文字ではこの横線は gemination '二重子音' を表している、例えば /k/ の縦棒に横線が書かれたものは /kk/ を表す。この横線は縦棒が有る場合に限るので /m/ の場合はお椀型の右線を上延ばし横線を入れるか *m* を上下に重ねて書かれているか、或いは *m* だけが書かれる。

Bronkhorst に依れば Skt. はバラモンの言語で、宮廷でバラモンが優勢になり Skt. が高尚な言語になり、仏教でも使われる様になったとある。因みにアショカ碑文も宮廷言語の Prākṛit で書かれている。仏教において何時 Skt. が使われ出したのかは共時的 'synchronic' 通時的 'diachronic' 現象を含め可成り難しい問題であり、オリジナルが Prākṛit で書かれた写本が後世に Skt. で書き直された可能性もある。Skt. が嘗てのアラム語同様 *lingua franca* '共通語' であれば仏教伝播の強力な手段になるが、夫々の書き手のミスや解釈の問題も含まれ (e.g. karma → kāma in *A critical Pāli Dictionary* Vol.III p. 393) また言語学的見地から仏教梵語に見られる様に更に複雑な様相を示す。

以下第 1 章 Brammaṇa の transliteration '字訳' と右に私の単語の訳を中心にした仮の translation '翻訳' を示し問題点を挙げてみたい (GDhp の ⟨⟩ は子音の省略を表す)。

Brammaṇa

1

na jaḍa'i na gotreṇa	not by hair braids, not by lineage
na yaca bhodi bramaṇo	not by birth, (one) is a Brahman
yo du brahetva pavaṇa	but who after having suppressed evils

aṇu-thulaṇi sarvaśo (who are) small or large in everyway
 brahidar eva pavaṇa is indeed a breaker of evils
 brahmaṇo di pravucadi (such a person) is called "Brahman"

jaḍa'i = Pāli *jaṭahi*, Skt. *jatayā*, inst. of *jaṭā* 'matted lock'.

brahetva: Norman 説では abs. of √*brah* 'remove', 同所の Pāli 265 では *sameti* (Pāli *sammati*, Skt. *śamyati*, caus. of √*śam* 'to suppress'); Skt. (Udv. xxxiii 8) *bāhayate* (caus. of √*vāh* 'to press'. Abs. *-tvā* は統語上おかしい。考えられるのは Skt. *bāhitatvāt* (Udv. xxxiii 8 下部参照) or Pāli 267 *bāhetvā* からの影響か？

pavaṇa = Pāli *pāpāni* (nt. acc.pl.), 或いは Skt. *pāpānām* (gen.pl. for object), /-p-/ → /b/ → /-v/ は GDhp の特徴。筆者は genitive object に取りたい。

brahidare: Norman 説では *brah-i-tar-e* 'one who removes'; Pāli *samittā* 'from? stopping', Skt. (Udv. xxxiii 8) *bāhitatvāt* 'from the pressing'.

Skt. *bā-* が GDhp では *bra-* と書かれたのは過度のサンスクリット化、或いは意味上において似ている Skt. √*brh* 'tear off' を代替したものか (?)。

pravucadi = Pāli *pavuccati*, Skt. *pravucyate*, pres. pass. of √*vac* 'to speak'.

この章の最初と最後は6 Pāda の構成になっている。

バラモンになるには生まれだけが原則だが修行なしでは真のバラモンとは言えない：

the grammarian Patañjali (second half of second century BCE); *Vyākaraṇa-Mahābhāṣya* I p. 411 l. 16–17 (on Pāṇinian sūtra 2.2.6): *tapaḥ śrutam ca yonīś cety etad brāhmaṇakāraṇam/ tapaḥśrutābhyāṃ yo hīno jātibrahmaṇa eva saḥ ||* "Asceticism, learning and descent make a Brahmin; without asceticism and learning he is nothing but a Brahmin by birth." (Bronkhorst *How the Brahmins Won* p.114).

2

ki di jaḍa'i drumedha what is a foolishness with hair braids to you?
ki di ayiṇa-śaḍi'a what is with robe of animal skin to you?
adara gahaṇa kitva inside, having made bush
bahire parimajasi outside, you wipe (it) off

ki di = Pāli/Skt. *kiṃ te* 'what? to you (Norman 説)'、或いは *kiṃ tu* '更に' (筆者の意見), *di* の *-i* は *ki* に引っ張られたもの？

śaḍi'a = Pāli *sātiyā*, inst. of *sāṭī* 'robe', Skt. *sātēna*, *śa* は Skt. だが語形は Pāli に近い。

adara = Pāli/Skt. *antara* 'inside', *aṃtara* → *adara*, /ṃ, n/ は示されない事や、/-t-/ → /d/ はイラン系の言語の特徴。

bahire = Pāli/Skt. *bāhiraṃ* 'outside', /re/ の /-e/ は /hi/ に引かれたか？ *bāhiraṃ* の /aṃ/ の /

m/ が落ちて /e/ になった (Norman 説)、或いは loc. を意識したか?

majasi = Pāli majjasi, Skt. mārjati, pres. of √mrj 'to wipe', /rj/ → /jj/ → /j/, /r/ は消える。

3

yasa dhamo vi'añe'a	one would know the dharma of which
same-sabudha-deśidā	<i>samyaksambuddha</i> has showed
sakhaca ṇa namase'a	having honored (it), one should do homage so (← it)
agi-hotra ba brahmaṇo	as Brahman (honors) the fire-sacrifice

yasa = Pāli yassa, Skt. yasya (Norman 説では Pāli yamhā とあるので Skt. yasmāt → yassā → yasa).

vi'añe'a = Pāli vijāneyya, Skt. vijñānāyāt, opt. of √jñā 'to know'.

deśidā = Pāli deśitaṃ (dhammaṃ と同格), *trema* (double points over /a/) は写本の上に認められるが、コートン語やトハラ語に見られる -ā の書き方で /ə/ を表す。

sakhaca = Pāli sakkaccaṃ, Skt. satkr̥tya abs. of √kr̥ 'to make'.

ṇa = Pāli pron. 3. sg. n. naṃ 'it'.

ba = Pāli va, Skt. iva 'like, as'.

4

na yaca brahmaṇo bhodi	not by birth, Brahman exists
na trevija na śotri'a	not (by) three knowledges, not by hearing
na agi-parikiryā'i	not by means of making fire-action
udake oruhaṇeṇa va	like by going down into the water

yaca = Pāli jaccā, Skt. jātya, inst. of *jāti* 'birth'.

trevija = Pāli tivijja, Skt. traividya, /dy/ → /jj/ → /j/.

śotri'a = Pāli sutiyā, Skt. śrutiyā, inst. of *śruti* '随聞', /śr/ → /ś/ (Skt. に近い), /r/ は落ちる。

/t/ → /tr/ は過度のサンスクリット化, /y/ → ø.

kiryā'i = Pāli kiryāya (inst. of *kiryā* '唯作'), Skt. kriyayā (inst. of *kriyā*), Pāli に近い。

o-ruhaṇeṇa = Pāli ava-rūhanena, Skt. rohaṇena, inst. of *rohaṇa* '成長' from √ruh 'to ascend', しかし *ruhaṇeṇa* は韻律から *ruhena* の方が合う。

5

puvve-nivasa yo uvedi	who knows the previous dwelling
svaga avaya ya paśadi	who sees the heaven and hell

bbhavu = Pāli *bbhavo*, Skt. *bhāva* 'birth', *bbha* は Skt. *rbha*, Pāli *bbha* であるが GDhp では /bha/ を表す。gemination 重字のサインは Pāli の影響。

asido = Pāli *asita*, Skt. *āsrita* 'not attached (with loc.)' or pp. of √*sā* 'to bind' as No. 5

lokasya = Pāli *lokassa* (gen.), *asido* が Skt. √*śri* 'to resort' であれば /loka-smin/ (lok.) → -*ssi* → *si* + /a/? になるが /a/ が問題、sy で /i/ (loc.) を表す (No.42 abs. -*ya* → -*i*) ? 此処は Skt. の gen. にとり subject を表すとしたい。sya は新造字。

8 (Sn. 655)

<i>taveṇa</i> <i>bramma-yiryēṇa</i>	by asceticism, by brahma-practice
<i>saṇameṇa</i> <i>dameṇa</i> <i>ca</i>	by self-control and by taming
<i>edeṇa</i> <i>brammaṇo</i> <i>bhodi</i>	by this, Brahman exists
<i>eda</i> <i>brammaṇa</i> <i>utamū</i>	this (is) the best state of Brahman

taveṇa = Pāli/Skt. *tapena*, inst. of *tapas* '苦行', /p/ → /b/ → /v/ はトハラ語にもある音韻変化。

bramma-yiryēṇa = Pāli *cariyā*, Skt. *caryā* '所行', /c/ → /y/.

saṇama = Pāli *saṇama*/*saṃyama* '自制', /ṃ/= /n/ はトハラ語にもある音価。/ny/ → /ñ/.

dama = Pāli/Skt. *dama* '調服'; *brammaṇa* = Pāli *brahmaṇa* ← *brahmaṇa-ya*.

中村1984, p.364-5: *saṇama* は叙事詩に説かれ、その他はウパニシャッドに述べられている修行である。これらは何ら仏教特有のものではない。*tapas* はジャイナ教などで苦行を重んずるのを直接に受けている。

9

<i>china</i> <i>sodu</i> <i>parakamu</i>	cut the stream off! after having made effort
<i>kama</i> <i>praṇuyu</i> <i>bramaṇa</i>	push away passions! oh Brahman!
<i>na</i> <i>apraha'i</i> <i>muṇi</i> <i>kama</i>	not having given up passions, a saint does not
<i>ekatvu</i> <i>adhikachadi</i>	attain to separate state

china = imp. of √*chid* 'to cut off' (pres. *chinatti*, cf. Whitney p.50).

sodu = Pāli *sota*, Skt. *srotas* '流' from √*sru* 'to flow'.

parakamu = Pāli *parakkamma*, Skt. abs. *kram-ya*, /m/ の palatal は無い。

kama = Pāli *kāme* (acc. pl.), Skt. *kāmām*.

praṇuyu = imp. of √*nud* 'to push away', *ṇ* は /-n-/ , /d/ → /y/. -*u* は前の *ṇu* に引っ張られた。

apraha'i = /a-/ 'not' + *pra* + abs. of √*hā* 'to leave', /y/ → *o*.

ekatvu = Pāli *ekattaṃ*, Skt. *ekatvaṃ* '独住, 遠離', 筆記者は Prākṛit /tt/ だけでなく Skt. /tv/ も書写している。-*u* は Skt. /-am/ を表す傾向がある。

kachadi = Pāli *gacchati*, /g/ → /k/ はトハラ語的であるが、コータン語では *k* は ⟨g⟩ に発音される。/t/ → /d/ は俗語的或いはイラン語的である。

10 (中村1978, p.303第33章60偈)

<i>china sodu parakamu</i>	cut the stream! after having made effort
<i>kama pranuvu bramana</i>	push away passions! oh Brahman!
<i>saḡaraṇa kṣaya ñatva</i>	having known the destruction of imaginations
<i>akadaṇo si brammana</i>	you are a knower of obligation, oh Brahman!

saḡaraṇa = Pāli *saṅkhārānaṃ*, Skt. *saṃskārānām* (gen. pl.) ‘行, 現象’, /ṃ, ñ/ → ø, /sk/ → /kkh/ → /kh/ → /gh/, Brough は *ḡ* を *gh* とするが Boyer/Rapson/Senart 1920の文字表 (Plate XIV, No.24) により *ḡ* とする。もし筆写者がイラン系の人であれば音価は /ɣ/ の可能性がある。

kṣaya の /kṣ/ (下部の台なしのカクテルグラスの様な形の文字 𑀓𑀲) の音価は不確かである。以下 “Bailey 1946, pp. 291–304” を参照する。Boyer は *ch* と字訳したが, Hultsch, Burrow, Konow, Bailey らは *kṣ* と読んだ。Skt. /kṣ/ は原則的に *kṣ* と書写されるが Skt. /ch/ はコータン語では *kṣ*, *tc*, *khy*、トハラ語では *kṣ* となる (e.g. Skt. *chatra* → *kṣatra*)。Skt. /kṣaṇa/ は Gāndhārī では *khaṇa* になっているが、その他は *kṣ* と字訳されている。一方コータン語の *kṣ* は中国語の *ṭṣ* を表し、また中国語の Gāndhārī の音写は /ṭṣ/ になっている。この事から Bailey はこの Gāndhārī の文字の字訳を *ç* (retroflex /c/) とする事を提案している。この説は Salomon も支持しているが、Skt. /ch/ と中国語の /ṭṣ/ との関係やコータン語、トハラ語の /kṣ/ も含めて更なる音韻学的な研究が必要である。

akadaṇo: Pāli *a-kata-ñṇu* (adj.), Skt. *a-kṛta-jña*, ‘忘恩の’, 中村は作られざるもの (= ‘*nirvāṇa*’) とする。Skt. /jñ/ → /ññ/ → /ñ/.

11 (中村1978, p.304第33章63偈)

<i>na brahmaṇasa prahare’a</i>	one should not hit a Brahman
<i>nasa muje’a bramani</i>	Brahman should not show anger at him (=hitter)
<i>dhi bramaṇasa hadara</i>	pooh! murder of Brahman
<i>tada vi dhi yo ṇa mujadi</i>	then also pooh! (one) who show anger at him

brahmaṇasa = gen.obj., Norman は *brahmaṇo* (nom.sg) と *asa* (gen.obj.) を分けるが英訳のように梵天が梵天を打つことになり意味的におかしい。ここは梵天の所有格にとって *prahare’a* の目的語にとるべき。

prahare’a = Pāli *pahareyya*, Skt. *praharet*, opt. 3.sg. of *pra-√hr̥* ‘to strike’. Pāli に近い。

muje'a = Pāli *muñcetha* (injunctive med. 3.sg. of √*muc* 'to release') しかし *muje'a* は *hare'a* と同じく opt. 3.sg. of √*muc*; *bramani* は nom.sg. が文脈上合うので *-i* は母音一般と解す。

nasa = Pāli *na assa* (gen. object) 'not him'.

dhi = Pāli *dhi*, Skt. *dhik* 'alas!'

hadara = Pāli *hantar*, Skt. *hantā* (nom.sg. of *hantr̥*) 'killer' from √*han* 'to kill'.

vi = Pāli *pi*, Skt. *api*, /p/ → /b/ → /v/ (*w* と書かれる) の変化はトハラ語にも見られる。

ṇa = Pāli *naṃ*, *ta* の m. sg. acc. 'him'.

12 (中村1978, p.303 第33章61偈; p.127 Dhp 294 buddhaghosa 註)

<i>madara pidara jātvā</i>	having killed/overcome (his) mother and father
<i>rayaṇa dva yu śotri'a</i>	(like) kings, having killed/overcome two ministers
<i>raṭha saṇayara jātvā</i>	kingdom (and) follower
<i>aṇiḥo yaḍi brahmaṇa</i>	Brahman goes without suffering

madara pidara = Pāli/Skt. acc. *mātaraṃ pitaraṃ*.

jātvā: この Verse は Uv. では2つの違う章 (29章 Yuga 24, 33章 Brāhmaṇa 61, 62) に入り込んでいて既に混乱を来しているし、中村が下に示す様に引用している Buddhaghosa の註も *ad hoc* に感じる。

Uv. *hatvā*, Dhp. *hantvā* とあるが目的語に関して中村1978, p.303では「母」を「妄愛」、「父」を「われという想い」などとして「滅ぼして」(←「殺して」)を保つ様にしている。バラモン思想では父母や王族を殺す事が是認される以外 (Bṛhadāraṇyakopaniṣad 4・3・22) 一般的な仏教から見ると有り得ない事 (例えば中部第115多界経: 凡人の父、母、阿羅漢、如来、僧団殺しの五逆罪) なので他の可能性を探ってみた。

先ずこの文字は *j* の上に superscript line として横線が引かれているもので Norman は (*jh* の文字は他にあるが) *jh* と解釈して √*kṣan* 'distroy' を考えた。/kṣ/ → / (k) kh/ → / (g) gh/ → / (c) ch/ → / (j) jh/、或いは /kṣ/ → / (k) kh/ → / (c) ch/ → / (j) jh/ と変化するが /kh, gh/ → /ch/ は口蓋化する原因が分からず無理がある。

Pāli *hantvā* から √ (g) *han* 'to strike' が考えられるが √*kṣan* 'distroy' と同じで / (g) h/ → /jh/ に無理がある。もし √ (g) *han* であれば No.18の *hadī, ḡadhedi* から見て *hatva* になる。

√*dhyā* 'to think' の /dhy/ → /jh/ (/dhyāna/ → /jhāna/) も考えられるが *aṇiḥo* = Pāli/Skt. *aniḡha* '無苦、無悶' に合わない。

Boyer/Rapson/Senart 1921: superscript line is used with other letters to denote a 'compound consonants' (p.302) …… is a mark of abbreviation (p.320). 他の例として28偈の *baṇa* = Pāli/Skt. *bandha* がある。もしこれが正しいと √*hā* の abs. *jahitvā* 'having left' が考えられるが² *akṣaras*

が1 akṣara になるのは無理がある。最後に √jyā 'overpower' が考えられる。これだと '殺さず' 精神的・思想的に屈服させ、圧倒して、無悶にして威風堂々として進む事ができる。結論として √han 'to strike, kill' が本来の用語であれば、初期大乘仏教には Brahmanism が色濃く残っていた事になり、√jyā 'to overpower' が考えられていれば慈悲を重んずる仏教的な色彩になっていたと考えられるが、文脈から後者を取りたい。

rayaṇa = Pāli rājāno, Skt. rājānaḥ (nom.pl.) 'kings'.

yu = Pāli/Skt. ca 'and', -u は母音一般、位置 (dve の後) が問題だが Pāli の khattiye から見て *dve khattiye* と取りたい。

śotriṇa = Pāli khattiye (acc.pl.), Skt. kṣatriyān (acc.pl.), *śotriṇa* は No.4 の Pāli sutiya, Skt. śrutiya, inst. of *śruti* '随聞' と同じ形だが acc. なので Pāda a の *jatva* の目的語ではなく、Pāda c *jatva* の目的語になる。また *s* から見て *kṣatriya* ではなく *śruti* '随聞' の acc.du. *śruti* が考えられ 'two ministers' (左大臣、右大臣?) という意味に取りたい。

raṭha = Pāli raṭṭhaṃ, Skt. rāṣṭraṃ 'kingdom'; *saṇayara* = Pāli sa-anucaraṃ 'follower'.

13

<i>rayaṇa pradhamu jatva</i>	(like) kings, having killed/overcome the best one
<i>pariṣa ja aṇadara</i>	and council immediately
<i>diṣi sa-seṇaka jatva</i>	having left/overcome devil with army
<i>aṇiho yadi brahmaṇo</i>	Brahman goes without suffering

pradhamu = Pāli pathamaṃ, Skt. prathamam 'primary'.

pariṣa ja = Pāli parisā, Skt. pariṣad ca 'and assembly'.

aṇadara = Pāli/Skt. an-antaraṃ 'having no interior, immediately'.

diṣi = Pāli dūsin 'devil', Skt. dūṣi 'destroying', *dū* → *di* は -ṣi からの影響。

sa-seṇaka = Pāli sa-seniya-ka, Skt. sa-sainya-ka, sa 'with'+ *senā* 'army' + 指小辞 -ka.

14

<i>yada dva'eṣu dhammeṣu</i>	when Brahman is attained to two kinds of Dharmas
<i>parako bhodi brahmaṇo</i>	
<i>athasa savvi saṇoka</i>	then he knew all <i>saṃyoga</i>
<i>aṭṭha gachadi jaṇada</i>	he gets (← goes to) the knower's sense

dva'eṣu = Pāli/Skt. dvayeṣu, loc.pl. of *dvaya*.

parako = Pāli pārāgū 'attained', Skt. pārāga 'crossing over', /g/ → /k/ は No.9 を参照。

athasa = Pāli atha assa (gen. subject of *jaṇada*).

jaṇada = Pāli jāna-to (← *tas*, gen.sg.) 'of knower'.

aṭṭha = Pāli atthaṃ, Skt. arthaṃ '道理', Brough は *asta* とするが^s, *sta* ではなく *ṭha* の縦線に重字を表す横線を入れたもの⁴で *ṭṭha* と見る。Pāli では /rtha/ → /ttha/ だが^s GDhp では /r/ の影響で *th* を反舌 retroflex にしている。

15 (meter 4/7)

na brahmaṇas eḍiṇa kiji bhodi	there is nothing with this for Brahman
yo na nisedhe manasa pri'āṇi	who would not prevent pleasantness of the mind
yado yado y [^] asa maṇo nivartadi	whenever one who changes his mind
tado tado samudim aha saca	then he says (← said) the hypocrisy and the true

brahmaṇas = GDhp. brahmaṇasa, m.c. の結果で Sandhi ではない。

eḍiṇa = Pāli/Skt. etena, inst. of *etad* 'this'; *kiji* = Pāli kici, Skt. kiñcid 'something'.

nisedhe = Pāli nisedho 'prohibition', 此処では opt. of √sidh, *ni-sedheya* 'he would repel'.

manasa pri'āṇi = Pāli manaso piyehi 'with love of mind', Skt. manasas priyāni 'loves of mind', Skt. に近い。

samudim = Pāli sammati-m-eva (-m- は *svarabhakti*), しかし此処は目的語である

aha = Pāli/Skt. āha 'says, said', 3.sg. perf. of √vah 'to say', Pāli とは相違。

saca = Pāli saccaṃ, Skt. satyaṃ 'truth'. Pāli は *dukkhaṃ* で文脈も含めて相違を示す。

16

brahetva pavaṇi brahmaṇo	having torn off evils, for the Brahman
sama'iyya śramaṇo di vucadi	(it) is said (as) "unchanged conduct of monk"
pavvaḥi'a atvaṇo mala	having driven away his own dirt
tasa pavva'ido vucadi	(it) is said (that) he left home

brahetva = abs. of √bṛh 'to tear'; *pavaṇi* = Pāli/Skt. pāpāni, n.pl. of *pāpa* '悪'。

sama'iyya = Skt./Pāli samacaryā 'equal practice, 平等行'。

pavvaḥi'a = Pāli pabbājeyya, Skt. pravrajayet, caus. opt. of √vraj 'to drive away' (/j/ → /y/ → /i/ → h??), 或いは √vah 'to carry' の abs. *pravahiya* 'having gotten rid of' も考えられるが *vv* (prav → parv? Norman 説) が説明できない。

atvaṇo = Pāli attano, Skt. ātmanaḥ (gen. sg.), Skt. /tm/ → /tv/.

tasa (gen. sg.) = Pāli tasmā (abl. sg.), *pavvaḥi'a* が abs. であれば *tasa* は m. gen. subject になり opt. であれば n. abl. になるが *pavvaḥi'a* (√vraj か √vah) も含めて混乱を感じる。

pavva'ido = Pāli pabbajita, Skt. pravrajita '出家', pp. of √vraj 'to proceed'.

17

na aho brahmaṇa bromi	I do not call (him) a Brahman
yoṇeka-matra-sabhamu	(because of) birth from womb (of) mother
bho-va'i namu so bhodi	he is called a greeting teller
sayi bhodi sakijaṇo	if (one who) is (obsessed with) something
akijaṇa aṇadaṇa	(he has) nothing, not taking
tam aho bro (mi) mmaṇa	I call him a Brahman

yoṇeka-matra-sabhamu = Pāli yonijaṃ (胎生) matti (mātu) -saṃbhavaṃ (母から生まれた), /j/ → /y/ → /' / → /k/ これは過度のサンスクリット化? 或いは接尾辞の -ka? *matra* の *tra* は Skt./tr/ → /tri/。 /v/ → /m/ は両方とも唇音で Gandhārī では良く見る音変化。

bho-va'i namu = Pāli bho-vādi nāma 'greeting-teller with name'.

sayi = Pāli sace, Skt. sacet 'if'; *sakijaṇo* = Pāli sa-kiñcana '有所得、有執着の'。

aṇadaṇa = Pāli/Skt. an-ādāna '無取'; *bro mmaṇa* = *bromi brahmaṇa*.

18

niha'i daṇa bhudeṣu	having put down a stick in persons
traseṣu thavareṣu ca	(who are) in trembling and not moving
yo na hadi na ḡadhedi	who does not strike, does not make kill
tam aho bromi bramaṇa	I call him a Brahman.

niha'i daṇa = Pāli ni-dhā-ya (abs. of √dhā) daṇḍaṃ 'having put down a stick'.

traseṣu thavareṣu = loc.pl. Pāli tasa thāvāra, Skt. trasa sthāvāra '動不動', Skt. は /tra/、Pāli は /th/ を使用。 *bhudeṣu* と同格。

hadi = Pāli hanti √han 'to smite' (主に現在語幹直接法), /nt/ → /t/ → /d/.

ḡadhedi = Pāli ḡhātetī, Skt. ḡhātayati, caus. of √ghan 'to make kill' (現在語幹直接法以外) /t/ → /d/ → /dh/ は過度のサンスクリット化。

19

yo du driḡa ci rasa jī	who, but as well long as short
aṇo-thulu śuhasūhu	small (and) big, beautiful (and) not beautiful
loki aḍiṇa na aḍi'adi	in the world, (who) does not take (what is) not given
tam aho brommi bramaṇa	I call him a Brahman

driḡa = Pāli dīghaṃ, Skt. dīrghaṃ 'long'; Norman は /dirgha/ → *driḡa* とするが、この様な methathesis は認められない。 *dri* は過度のサンスクリット化、或いは -r (*sa* の下部の様に縦線

の下を右に伸ばす) は単なる装飾で実際は /d/ ? *ga* は /ya/? (参照 No.10)。

rasa = Pāli rassa, Skt. hrasva 'short', Pāli に近い ; *ci*, *ji* = Pāli/Skt. ca.

aṇo-thulu = Pāli aṇu-thulla, Skt. aṇu-sthūla 'small (and) big'.

śuhaśuhu = Pāli subha-asubha, Skt. śubha-aśubha 'beautiful (and) not beautiful', /bh/ → /h/, Skt. に近い。

adiṇa = Pāli/Skt. a-dinnaṃ 'not given', pp. of √dā 'to give'.

adīadi = Pāli ādiyati, Skt. ādayati 'he takes', Pāli に近い。

20

yo du kama prahatvaṇa	who, but having given up desire
aṇakare parivaya	into houselessness, should wonder round
kama-bhoka-parikṣaṇa	the desire (and) enjoyment (are) destroyed
tam aho bromi brahmaṇa	I call him a Brahman

prahatvaṇa = Skt. prahātvā, abs. of √hā 'to leave', abs. -*tvana* は *metri causa*.

aṇakare = Pāli/Skt. an-āgāra '出家', -e は loc., /g/ → k は No.9を参照。

parivaya = Pāli paribbaje, opt. of √vraj '遊行すべし', Skt. /vr/ → /v/, -r/ は落ちる、/j/ → /y/ は閉鎖過程省略後の fricative 摩擦音化。

21

vari puṣkara-patre va	like water on a leaf of lily
arage-r-iva saṣṣava	like a seed at the awl point
yo na lipidi kamehi	who does not smear with desires
tam ahu bromi brahmaṇa	I call him a Brahman

puṣkara = Pāli pokkhara, Skt. puṣkara '蓮', *ṣka* は Skt. 化のため作られた文字。

arage (loc.) = Pāli āragga, Skt. ārā-agra 'きりの先', /r/ は落ちる。

saṣṣava = Pāli sāsapa, Skt. sarṣapa, /rṣ/ → ṣṣ は Skt. に近い。Skt. /p/ → v はトハラ語 (→ /w/) や Gdhp の特徴。

22

a-kakaśa viṇamani	not harsh, making understand
gira saca udira'i	he would produce a word (and) truth
ya'i naviṣa'i kaji	by which he would not offend anyone
tam ahu bromi brahmaṇa	I call him a Brahman

kakaśa = Pāli kakkasaṃ, Skt. karkaśaṃ 'harsh' (acc.), Skt. に近いが /r/ は落ちている。
viñamani = Pāli viññāpaṇiṃ (f.), Skt. vijñapanāṃ (f.) 'to teach', Pāli に近いが ^s-*mani* は現在分詞 /-mane/. Norman は /p/ → /v/ → /m/ とするが ^s/v/ → /m/ は考えにくい。-*ni* = /-ne/.
udira'i = Pāli udīraye, Skt. ud-īrayāt, opt. of √ir 'to set in motion', Pāli に近い。
ya'i = Pāli/Skt. yāya, relat.pron. f. inst. 'by which'.
naviśa'i = Pāli na abhisaje, Skt. na abhisajyāt, opt. of √sañj 'to hang', /bh/ 閉鎖音 → /v/ 摩擦音, /ṣ/ は Toch. では palatal /s/ だが ^sdental /s/ → retroflex /ṣ/ はインドの ruki 規則か?
kaji = Pāli kaci, Skt. kaṃcit 'someone', 無声音 /c/ → 有声音 /j/, Pāli に近い。

23

<i>yasya ka'eṇa vaya'i</i>	for whom, by body (and) by speech
<i>maṇasa nasti drukida</i>	by mind, there is no bad deed
<i>savrudu trihi ḥhaṇehi</i>	completely controlled by three bases
<i>tam aho bromi brahmaṇa</i>	I call him a Brahman

yasya = Pāli yassa 'whose', No.7 と同じく Skt. gen. を使っている (gen. commodi)。
vaya'i = Pāli vācāya, Skt. vācayā (inst.); *maṇasa* = Pāli/Skt. manasā (inst.).
drukida = Pāli dukkataṃ, Skt. duṣkṛtaṃ '悪作'。 *dr* = /d/ ? (No.19参照)。
savrudu = Pāli saṃvutaṃ, Skt. saṃvṛtaṃ, pp. of √vr 'to cover', *vr* は過度なサンスクリット化か、単なる *v* (No.19参照)。此処は -*u* を分かり易くする為 -*r* を書き加えている。
ḥhaṇehi = Pāli ṭhānehi, Skt. sthānehi, inst.pl. of *sthāna* '処'、Pāli に近い。

24

<i>vaśada varada</i>	calmed (and) ceased
<i>mana-bhaṇi aṇudhada</i>	soft speaker, not excited
<i>attha dhamma ja deśedi</i>	(he) teaches the sense and justice
<i>tam aho bromi brahmaṇa</i>	I call him a Brahman

vaśada = Pāli upasanta, Skt. upaśanta '静寂な'; *varada* = Pāli uparata, Skt. uparata '止息の', pp. of √ram 'to be content', /up/ → /ub/ → /uv/ → /v/.
mana-bhaṇi = Pāli manda-bhaṇa '鈍い話', Skt. manda-bhāṇika (?) 'a slow dramatic performance', /nd/ → /n/ と -i の説明が難しい。
aṇudhada = Skt. an-ud-hata 'not proud' (Norman 説), Pāli/Skt. *an-uddhata* 'not raised'.
attha = Pāli attha, Skt. artha '道理'、Brough は *artha* とするが *r-* は gemination のサイン、次の No.25 *utamatha* を参照。

ja = Pāli/Skt. ca; *deśedi* = Pāli *deseti*, Skt. *deśayati* 'to teach', caus. of √*dis* 'to point'.

25

<i>vaśada varada</i>	calmed (and) ceased
<i>mana-bhaṇi aṇudhada</i>	soft speaker, not excited
<i>utamatha aṇuprato</i>	attained (to) highest aim
<i>tam aho bromi brahmaṇa</i>	I call him a Brahman

utamatha = Pāli *uttama-attha*, Skt. *uttama-artha* '最上義', /r/ は消える。

aṇuprato = Pāli *anu-ppattaṃ*, Skt. *anu-prāptaṃ* '到達した', /pt/ → /tt/ → /t/.

26

<i>yasya rako ca doṣa ca</i>	whose passion and also anger
<i>avija ca vira'ida</i>	and ignorance (are) disappeared
<i>kṣiṇasavu arahada</i>	(who has) destroyed the desire, (he is) an <i>arahant</i>
<i>tam ahu bromi brahmaṇa</i>	I call him a Brahman

vira'ida = Pāli *vi-rājita*, Skt. *vi-rakta*, pp. of √*rañj* 'to color', Pāli は受動的にとるが *yasya* (次の No.27の *yasa* と同じ) を gen. subject として pp. *vira'ida* を状態を表す能動的な述語とする事も可能。

kṣiṇasavu = Pāli *khīṇa-āsava*, Skt. *kṣiṇa-āsrava* '漏尽者', Skt./r/ は消える。-*u* は acc. /am/.

arahada = Pāli *arahanta*, Skt. *arhant* (pres.part. of √*arh* 'to deserve') '阿羅漢', Pāli に近い。/nt/ → /t/ → /d/.

27

<i>yasa rako ca doṣa ca</i>	whose passion and also anger
<i>maṇu makṣu pravaddo</i>	pride (and) hypocrisy (are) removed
<i>paṇa-bhara visaṇutu</i>	(whose) burden (is) disappeared, (he is) detached
<i>tam ahu bromi brahmaṇo</i>	I call him a Brahman

maṇu = Pāli/Skt. *mānaṃ* '慢心'; *makṣu* = Pāli *makkhaṃ* Skt. *mraṅgaṃ* '偽善', /r/ は落ちてい
る。-*u* = -*aṃ* (acc.).

vadido = Pāli/Skt. *pātita*, caus. pp. of √*pat* 'to fall', /p/ → /b/ → v/, /t/ → /d/, Pāli では受動的
にとるが *yasa* を gen. subject として pp. *vadido* を能動的 (caus.!) な述語とする。

paṇa = Pāli/Skt. *panna*, pp. of √*pad* 'to go'.

visaṇutu = Pāli *visaṃyuttaṃ*, Skt. -*yuktaṃ* of √*yuj* 'to join', /ṃy/ → /ñ/, ṃ = /n/ はトハラ語

と同じ。-u = Pāli/Skt. /-am/ (acc.).

28

akośa vadha-baṇa ca	an abuse and a tie of killing
aduṭṭhu yo tidikṣadi	who is not hateful (and) patient
kṣadi-bala balaṇeka	tolerant power, strong army
tam ahu bromi brahmaṇa	I call him a Brahman

akośa = Pāli akkosa, Skt. ā-krośa ‘悪罵’, Brough は *akrośa* とするが写真上では -r は無い。

baṇa = Pāli/Skt. bandha ‘束縛’, ñ (n の上に横線) は No.12にある *j* と同じで違う文字 (/n/ と /dh/) の連字を表す (Norman 説は *bandha* → *banha*)。この事は筆記者が Skt. を熟知している事を示している。

aduṭṭhu = Pāli a-duṭṭha, Skt. a-duṣṭa ‘無瞋’、Pāli に近い。

tidikṣadi = Pāli titikkhati, Skt. titikṣate, 3.sg. desid. of √tij ‘to endure’.

kṣadi = Pāli khanti, Skt. kṣānti ‘忍辱’, *kṣ* に関して No.10を参照。/nt/ → /t/ → /d/ はイラン的。

balaṇeka = Pāli/Skt. bala-anika (n.) ‘strong army’, /-m/ (acc.) は落ちている。

29

avirudhu virudheṣu	not hostile in hostiles
ata-daṇeṣu nivudu	peaceful in taken sticks
sadaṇeṣu aṇadaṇa	not taking in takings
tam aho bromi brahmaṇa	I call him a Brahman

virudhu = Pāli/Skt. viruddha, pp. of √rudh ‘to obstruct’.

ata = Pāli atta, Skt. ātta, pp. of ā-√dā ‘to take’; *daṇeṣu* = loc.pl. of *daṇḍa* ‘stick’.

nivudu = Pāli nibbuta, Skt. nirvṛta ‘寂滅した、幸福な’。

sadaṇeṣu = Pāli/Skt. loc.pl. of *sa-ādāna* ‘有取’; *aṇadaṇa* = Pāli/Skt. an-ādāna ‘無取’。

30

yo idheva pre’añadi	who here indeed knows
dukhasa kṣaya atvaṇo	destruction of his own misery
vipramutu visañutu	completely released, disjoint
tam aho bromi brahmaṇa	I call him a Brahman

idheva = Pāli idha eva, Skt. iha eva ‘here indeed’, Pāli に近い。

pre’añadi = Pāli pajānāti, Skt. prajānāti, 3.sg. pres. of √jñā ‘to know’, *pre* の -e は palatal /j/ に

引っ張られたもの。

pramutu = Pāli pamuttaṃ, Skt. pramuktaṃ, pp. of √muc 'to release', Pāli に近い。

sañutu = Pāli saṃyuttaṃ, Skt. saṃyuktaṃ, pp. of √yuj 'to join', /ṃy/ → /ny/ → /ñ/.

31

na vaḷa'i navijapu	he should not meditate a new discourse (??)
pavaka na vicida'i	he should not think of bad effect
sadaśam atha-daśavi	good insight, sense-watcher
tam aho bromi brahmaṇa	I call him a Brahman

vaḷa'i = Skt. vi-dhyāyet, opt. of √dhyā 'to think', *ja* に関しては No.12参照。

viḷapu = Pāli vi-jappet, Skt. -jalpayet, opt. of √jalp 'to murmur' (or -jyāpayati, opt. caus. of √jyā 'to injure?'). もし *-u* が acc. /-am/ であれば Pāli/Skt. japaṃ 'つぶやき' となるが *na* が問題。Pāda b から見て *navijapu* は *vaḷa'i* の目的語になる (*navajalp*??)。 *ja* は *vaḷa'i* の影響か? この箇所は一致する偈もなく不明。

vicida'i = Pāli vi-cinteyya, Skt. vi-cintayet, opt. of √cint 'to think', /nt/ → /t/ → /d/.

sadaśam = Pāli sad-dassana Skt. sad-darśana '善の見識', *sadaśam* の *-m* は (手本に有った?) *svarabhakti* か *-na* の代用。

atha-daśavi = Pāli attha-dassāvin, Skt. artha-darśāvin '道理の見者'。 /r/ は落ちている。

32

asatsitha ḡahaḷhehi	not associated with house holders
aṇakarehi y^uha'i	and with house discards, (not associated with) both
aṇova-sari apicha	(he is) a wonderer without home, having few desire
tam aho brommi brahmaṇa	I call him a Brahman

asatsitha = Pāli a-saṃsaṭṭha, Skt. a-saṃsṛṣṭa, pp. of √sṛj 'to send forth', *-t-* は /ṃ/ (= /n/) と /s/ の間に入る *svarabhakti*、この現象はトハラ語にもある。

ḡahaḷhehi = Pāli gahaḷṭṭhehi, Skt. gr̥hasthaiḷ 'with house holders'.

aṇakarehi = Pāli anāḡārehi, Skt. anāḡāraiḷ 'with house leaves 出家', *k* = ⟨g⟩? No.9を参照。

y^uha'i = Pāli c'ūbhayaṃ, Skt. cobhayaṃ 'both'.

aṇova-sari = Pāli an-oka-sārim, Skt. an-okas-sārin, from caus. of √sṛ 'to flow', /k/ → /g/ → /y/ → ∅ は GDhp の特徴だが *va* は直前の *aṇo* の /o/ に引っ張られたか?

apicha = Pāli appicchaṃ, Skt. alpa-icchā '小欲の', Pāli に近い。

33

aradi radi ca yo hitva	having abandoned displeasure and pleasure
sabrayaṇo pradivado	rightly known, good remembered
savva-bhava-parikṣiṇa	all existences (are) completely destroyed
tam aho brommi brahmaṇa	I call him a Brahman

radi = Pāli/Skt. *ratim* ‘気楽’, *yo* は韻律から見ても不要。

sab (r) ayaṇ (o) = Pāli *sampajāno*, Skt. *saṃprajñāna* ‘正知の’ from *√jñā* ‘to know’, /mp/ → /b/ だが^s /mpr/ は /br/ にはならない。この単語の部分は写真では殆ど見えないので不確か。

pradivado = Pāli *patissato*, Skt. *pratismṛta*, pp. of *√smṛ* ‘to remember’, /sm/ → /sv/.

34

yasa pure ya pacha ya	for whom, in front and also behind
…… …… …… ……	(there is not something also in the middle)
akijaṇa aṇadana	possessing nothing, not taking
tam ahu brommi brahmaṇa	I call him a Brahman

yasa = Pāli *yassa*, Skt. *yasya*, gen. *commodi* ‘for whom’.

pure ya pacha ya = Pāli *pure* (loc. ‘前に’) *ca pacchā* (adv. ‘後に’) *ca*, Skt. *puras ca paścāc ca*.

akijaṇa aṇadana = Pāli/Skt. *akiñcaṇaṃ* ‘無所有’, *anādānaṃ* ‘無取’。

35

yasa pari avare ca	for whom, in other and this shore (of river)
para …… …… ……	other (and this shore, he does not know)
vikada-dvara visaṇota	without fear, apart from a tie
tam aho brommi brahmaṇa	I call him a Brahman

pari avare (loc.) = Pāli/Skt. *pāraṃ apāraṃ* ‘彼岸、此岸’, /-p-/ → /v/.

vikada-dvara = Pāli/Skt. *vīta-daraṃ* ‘without fear’. *dva* は /d/ (過度のサンスクリット化?)。

Norman は *vigata-dvara* (← *jvara* ‘burn’) とするが /jv/ → /dv/ は *ad hoc*. Pāli/Skt. の方が韻律や文脈から見合っている。

visaṇota = Pāli *visaññuttaṃ*, Skt. *visaṃyuktaṃ* ‘軛を離れた’. /ṃ (=n) y/ → /ñ/. Pāli に近い。

36

chitvaṇa paḷa saṃdaṇa	having cut off five bonds
…… …… …… ……	

nani-bhava-parikṣiṇa completely destroyed joy-existence
tam ahu bromi bramaṇa I call him a Brahman

paṇa saṃdāna = Pāli/Skt. pañca san (/ṃ) dāna 'five ties'.

nani-bhava-parikṣiṇa = Pāli nandibhavaparikkhiṇaṃ '歡喜渴愛の有を偏尽した「阿羅漢」'。/
nd/ → /n/ は不規則だが No.24にも出てくる。

37 ???Sn171, 大寶積經 (0310) 0174b26-0174b26 : 耳鼻舌身心 六塵并四大

ruva chada rasa gaṇa form, sound, taste, smell
phaṣa dhama ya kevala touch and law, all (of them)
praha'i na paritasadi having given up (六境), he is not afraid
tam ahu brommi brammaṇa I call him a Brahman

ruva = Pāli/Skt. rūpa (/p/ → /v/); *chada* = Pāli sadda, Skt. śabda; *gaṇa* = Pāli/Skt. gandha (/ndh/ → /n/); *phaṣa* = Pāli phassa, Skt. sparśa (/rś/ → /ṣ/). 色声香味触法

praha'i = p (ra) ahāya abs. of √hā 'to leave'.

paritasadi = Pāli parittsati, Skt. paritrasati 3.sg.pres. of √tras 'to be terrified'.

この偈は六種の感覚対象（色声香味触法の六境）を離れるのが真のバラモンであると言うものである。似たような趣旨は Sn171, 284にもあるが *pañca kāmagaṇa* 「五種の欲望の対象」と言うもので *manas* 「意」が第六である（*Dharma* 「法」は無い）。中村 p.291-2に依ると『*gaṇa* は Skt. では「徳」の意味に用いられるが、サーンキア哲学では物質的自然の三つの根本的構成要素を称する。原始ジャイナ教聖典の古い箇所では「感覚の対象」と言う意味に用いる。また叙事詩においても五種の感覚器官を通じた五種の対象を *gaṇa* と呼んでいるし散文の部分にも実例がある（MN. No.122, vol. III. p.114）。これらに対応する漢訳は「五色」（雜阿含經28卷、大正藏2卷 p.199上）や直訳して「五欲功德」（中阿含經49卷、大正藏1卷 p.739中）としている。玄奘は「世妙境」（法蘊足論6卷、大正藏26卷 p.482中、俱舍論8卷、大正藏29卷 p.41下）と適訳している。この様にジャイナ教の古いガーター並びに叙事詩と仏教の古いガーターにおける *gaṇa* の用例が一致しているが、後世の仏典やジャイナ教聖典からは消失した。』とある。此処 GDhp では古い仏典やジャイナ教聖典にある *pañca kāmagaṇa* + *Dharma* で世親の金剛般若經論 T1511.25.0785b28-9 不入色聲香味觸法。是名須陀洹故と一致する。

38

patasukula-dhara jadu person wearing dusty clothe

kiśa dhamaṇi-sadhada	meager vein tube (are) spread out (→ slim body)
jayada rukha-mulasya	meditated on (← of?) tree-root
tam ahu brommi bramaṇa	I call him a Brahman

patsukula-dhara = Pāli paṃsukūla-dhara, Skt. paṃśukūla-dhara ‘著糞掃衣者’, /ṃs/ → /nts/ (t-svarabhakti) → /ts/ (No.32 参照)。

jadu = Pāli/Skt. jantu ‘有情’, /nt/ → /t/ → /d/. /n/ は落ちる; *kiśa* = Pāli kiśa, Skt. kṛśa ‘thin’.

dhamañi-sadhada = Pāli/Skt. dhamani ‘血管’, santhata ‘覆われた’ → ‘痩せ細った’。

jayada = Pāli jhāyantam, Skt. dhyāyantam, pres.part. of √dhyā ‘to meditate’ (not j).

rukha-mulasya = Pāli rukkha-mūlasmiṃ, Skt. rukṣa-mūlasmin, /smin/ → /ssin/ → /si/ → *sya*? No.7, No.42参照, gen. と loc. が混合している。

39

eṇe-jaḡa kiśa vira	deer-leg, meager sage
apahara alolubhu	little food, not very eager
apaḡha apa-kica ji	little wealth and little duty
tam ahu brommi brammaṇa	I call him a Brahman

eṇe-jaḡa = Pāli/Skt. eṇi-jaṅgham ‘三十二相の一, 鹿の如き脛’。

vira = Pāli/Skt. dhīram ‘賢者’。/dh/ → /v/ は音韻論ではなく音声学的な問題、或いは *vira* ‘英雄’?

apahara = Pāli appahāram, Skt. alpa-āhāra, /lp/ → /p/。

alolubhu = Pāli/Skt. a-lolupaṃ ‘動貧なき’, /p/ ← /bh/, GDhp は古い形を残している。

apaḡha = Pāli appaḡḡham, Skt. alpa-arthaṃ, No.25, 30では *artha* の /r/ は落ちるが³, *ḡha* は *ḡha* の左上に縦線を付け加え Pāli の *ḡḡha* を表している。本来なら縦線下部に横線を入れる所だが³, *ḡha* の場合は横線3本になるので縦線を付け加えたものとする。

apa-kica ji = Pāli appa-kiccaṃ ca, Skt. alpa-kṛtyaṃ ca。

40

akrodhu aṇuvayaṣaṃ	without angry, without despair
viprasana aṇavila	settled down, not mixed up (=pure)
cadra ba vimali śudhu	like moon, without dirt (=clean), pure
tam ahu bromi brammaṇa	I call him a Brahman

akrodhu = Pāli a-kodham, Skt. a-krodham ‘not angry’。

aṇuvayaṣaṃ = Pāli/Skt. anupāyāsaṃ (an-upa-āyāsaṃ), /p/ → /b/ → /v/, /ṃ/ は通常落ちるが³

Brough は /ṃ/ にとる。此処は装飾的書法、或いは *-u* (=am) ?

viprasana = Pāli vippasanna, Skt. viprasanna ‘清浄の’, pp. of √sad ‘to sit’.

aṇavila = Pāli/Skt. anāvilaṃ (an-āvila) ‘濁りのない’。

cadra ba = Pāli candaṃ va, Skt. candraṃ iva, /n/ は落ちる。/dra/ は保持。/v/ → /b/ は過度のサンスクリット化。

śudhu = Pāli suddhaṃ, Skt. śuddhaṃ ‘pure’.

41

…… …… <i>ra dhira</i>	…… …… …… sage
…… <i>h</i> …… <i>viyidaviṇo</i>	…… …… …… conquered
<i>aṇiha ṇadaka budhu</i>	without suffer, washed, wakened
<i>tam ahu bromi bramaṇa</i>	I call him a Brahman

dhira = Pāli/Skt. viraṃ, No.39の使い方 (*vira* ← *dhira*) から見て混乱が見られる。

viyidaviṇo = Pāli vijitāvināṃ, Skt. vijita-āvin ‘大勝した’。

aṇiha = Pāli anejaṃ, Skt. an-ejāṃ ‘不動の’ (Norman 説), 或いは Pāli/Skt. anigha ‘無苦の’。

ṇadaka = Pāli nahātaṃ, Skt. snātaṃ ‘洗浴者’, from √snā ‘to bathe’, /s-/ は落ちる。

42

<i>chetva nadhi valatra ya</i>	having cut the strap and bound
<i>sadaṇa samadikrami</i>	having gone over the restraint
<i>ukṣita-phali’a vira</i>	(he has) thrown away the door-bar, (he is) a hero
<i>tam aho brommi brammaṇa</i>	I call him a Brahman

chetva = Pāli chetvā, Skt. chittvā, abs. of √chid ‘to cut’, Pāli に近い。

nadhi = Pāli nandhiṃ, Skt. naddhrī ‘紐’, Pāli に近い。

valatra = Pāli varattaṃ, Skt. varatrā ‘革紐’, /r/ → /l/ は Māghadism (Pischel § 256).

sadaṇa = Pāli/Skt. san/ṃdānaṃ ‘束縛’。

samadikrami (Brough は *-mmi* と読むが縦線 *-i* の下は装飾) = Pāli sahanukkamaṃ ‘付随’ (*chetva* の目的語), Skt. sam-ati-kramya, abs. (-ya) of √kram ‘to stride’.

ukṣita = Pāli ukkhita, Skt. utkṣipta, pp. of √kṣip ‘to throw’, 合字の前の /t/, /p/ は落ちる。

phali’a = Pāli paḷighaṃ, Skt. pariḷghaṃ ‘門’, Brough は *pha-* (過度のサンスクリット化?) と読むが右の装飾線を含め *pa-* と読む。/gh/ → /h/ → ∅.

43

yasa gadi na jaṇadi	his going, they do not know
deva-gaṇava maṇ (uṣa)	divine Gandharva, human being
tadhakadasa budhasa	of Tathāgata, of Buddha
tam ahu brommi bramaṇa	I call him a Brahman

gaṇava = Pāli gandhabba, Skt. gandharva, *ṇ* は合字 *ndh* を表す。

tadhakada = Pāli/Skt. tathāgata ‘如来’, /th/ → /dh/, *k* は /g/ を表す。

44

yo cudi uvedi satvaṇa	one who knows the death of persons
vavati ca vi savvaṣo	and also the rebirth universally
budhu adima-śarira	the Buddha, final body (acc.)
tam aho bromi bramaṇa	I call him a Brahman

cudi = Pāli cutiṃ, Skt. cyutiṃ from √cyu ‘to move’ → ‘death’.

uvedi = Pāli veti, Skt. vetti, 3.sg. pres. of √vid ‘to know’, *uve* で一音節、[u] (音声の /u/) は /v/ の発音を容易にする。

satvaṇa = Pāli sattānaṃ, Skt. sattvānām, gen.pl. of *sattva* ‘有情’。

vavati = Pāli/Skt. upapattiṃ ‘再生’。/up/ → /ub/ → /v/; *vi* = Pāli/Skt. api ‘also’。

savvaṣo = Pāli sabbso (水野 sg.abl.), Skt sarva-śas (affix -śas → adv., Mulius pl.acc.).

adima = Pāli antima (anta の最上級) ‘最終の’。/nt/ → /tt/ → /t/ → /d/。

45

akrodhu aṇuvayasa	(him who is) without angry, without despair
vipramutu puṇarbhava	(him who) released the rebirth
budhu vada-mala dhira	(him who is) woken, rejected dirt, firm
tam aho bromi bramaṇa	I call him a Brahman

Pāda a は No.40と同じ。

vipramutu = Pāli vipamuttaṃ, Skt. vipramuktaṃ, pp. of √muc ‘to release’, 此処も pp. は能動的で状態を表し、*puṇarbhava* ‘rebirth’ は目的語。

vada = Pāli vanta, Skt. vamita, pp. of √vam ‘to vomit’. Pāli に近い。

46

yo du puṇe ca pave ca	he who, but merit and also evil
-----------------------	---------------------------------

uhu <i>ṣaḡa uvaca'i</i>	has gone (aor.) beyond both attachments
<i>aṣaḡa viraya budhu</i>	without attachment, without dust, woken
<i>tam ahu bromi bramaṇa</i>	I call him a Brahman

puṇe ca pāve ca = Pāli *puññaṃ ca pāpaṃ ca*, *-e* は acc.pl. (?).

uhu = Pāli *ubho* (nom.?), Skt. *ubhau* (du.acc.?) 'both'. /bh/ → /h/.

ṣaḡa = Pāli *saṅgaṃ*, Skt. (ati) *ṣakta*, pp. of *√sañj* 'to hang', *ṣa* は Skt. から? /kt/ → /gd/ → /γ / *ḡa*?

uvaca'i = Skt. *upātyagāt* or *-agāyi* (aor.), Pāli *saṅga-atiga* '執着を越えた者 (阿羅漢)'.

47

<i>ja'i para-kada budhu</i>	meditator, attained other shore, woken
<i>jidavi akadagadi</i>	victor, speaker without doubt
<i>pruju deva-maṇuṣaṇa</i>	(he is) to be honored by gods and humans
<i>tam ahu brommi bramaṇa</i>	I call him a Brahman

ja'i = Pāli *jhāyīṃ*, Skt. *dhyāyin* 'meditator', *ja* ではない。

pāra-kada = Pāli/Skt. *pāra-gata* '彼岸に到れる'; *jidavi* = *jitavin* (Norman 説)。

akadagadi = Pāli *a-kathaṃ-kathin* '無疑者', Brough は *-ggadi* とするが縦線の下は装飾。

pruju = Pāli *pūja*, Skt. *pūj-ya* (ger.), *pru* は過度のサンسكريット化、或いは /p/. *-ju* の *-u* は *pū* の *ū* に引っ張られた。*deva-maṇuṣaṇa* は pl.gen.subj. で行為者を示す。

48

<i>ja'i para-kada budhu</i>	meditator, attained other side, woken
<i>kida-kica aṇasuvu</i>	done-duty, without passion
<i>budhu daśabaloveda</i>	woken, possessor of ten powers
<i>tam ahu bromi bramaṇa</i>	I call him a Brahman

Pāda a は No.47と同じ。

kida-kica = Pāli *kita-kiccaṃ*, Skt. *kr̥ta-kr̥tyaṃ*.

aṇasuvu = Pāli *an-āsavaṃ*, Skt. *an-āsraṃ* '無漏', Brough は *aṇasru* と読むが GDhp で /-r/ と
言う文字はないし、写真でも *-u* と見えるので *aṇasuvu* と読む。

daśabaloveda = Pāli/Skt. *-upeta* '具備した', pp. of *√i* 'to go'.

49

<i>gammira-praṇa medhavi</i>	deep knowledge, possessor of wisdom
------------------------------	-------------------------------------

margamargasa ko'ia	well informed about humanity and inhumanity
utam pravara vira	the best (and) excellent hero
tam ahu brommi bramaṇa	I call him a Brahman

gammira-praṇa = Pāli/Skt. gambhīra-pañṇaṃ/prajñāṃ.

ko'ia = Pāli/Skt. kovida ‘熟知する’。

utamu = Pāli/Skt. uttamaṃ ‘最上の’。

50

diva tavadi adicu	by day, the sun burns
radi avha'i cadrimu	at night, the moon shines
sanadhu kṣatri'o tavadi	well tied royal family burns
ja'i tavadi bramaṇo	meditator, Brahman burns
adha savva aho-ratra	then every night with moon
budhu tavadi teyasa	Buddha burns with fire

20 20 10

adicu = Pāli ādicco, Skt. ādityaḥ ‘the sun’, -u = -o/-aḥ (nom.sg.m.).

radi = Pāli rattim, Skt. rātrim, Skt. /tr/ は反映せず Pāli に近い。

avha'i = Pāli/Skt. ābhāti 3.sg.pres. of √bhā ‘to shine’. /vh/ は Gāndhāri 独特の文字。Skt. の気音を意識したものか？ Norman は *ābhāyate* を考えるが受動より能動の方が合う。

cadrimu = Pāli candimā, Skt. candrimā ‘moon’, /n/ は落ちる。*dri* は過度のサンスクリット化、或いは /p/ を表し -r は装飾？

sanadhu = Pāli sannaddho, Skt. saṃnaddhaṃ pp. of √nah ‘to tie’.

kṣatri'o = Pāli khattiyo, Skt. kṣatriyaḥ ‘王族’。

ja'i = Pāli jhāyi, Skt. dhyāyin, *ja* は Skt. の合字を意識している。

aho-ratra = Pāli aho-rattam ‘月夜に’；*teyasa* = Skt./Pāli tejas-ā (inst.) ‘火’。

バラモンの造形はガンダーラ彫刻や中央アジアのクチャ等の塑像に見られ、また文献的には法華經に梵天勸請として出て来るが、仏教との関係は実際どのようなものであったかは良く分からない。大乘仏教興起時代の Brahmanism と仏教との関係に関して、この Gdhp の研究は重要なものであるが言語学的解明が難しく Brough の研究以来、進歩していないと思われる。理由は書き手・読み手の（言語学的）能力、写本の出土地・出土状態や通時・共時を重要視しない研究方法などに依るものと考えられる。また東西南北の文化交流の比較研究と仏教文献学の

接点が少ないのも一因と思われる。

今後のガンダーラ文献の研究で、中国の老荘思想と仏教の関係、即ち大乘仏教の「空」と老荘の「無」の関連性からの格義仏教や禪宗の「不立文字」と『楞伽経』や『維摩経』の関係の様に（小川環樹1978『老子・荘子』45-47頁）インドの Brahmanism と仏教との関係が明らかになり仏教文献学の更なる発展が期待される。また Kuṣāṇa coin に出て来る Nana (Bactrian god) や Śiva (Oesho on coin) と Brahmanism の関係やガンダーラ弥勒像とバラモン像、2種の菩薩像の図像学的比較研究が挙げられる。

参考文献

- Bailey, H.W. 1945: *The Khotan Dharmapada* in BSOAS. XI, 3, Opera Minora edited by M. Nawabi Vol. 2, pp. 488-512, Shiraz, Iran, 1981.
- 1946: *Gāndhārī* in BSOAS. XI, 3, Opera Minora edited by M. Nawabi Vol. 2, pp. 293-325, Shiraz, Iran, 1981.
- Boyer/Rapson/Senart 1920: *Kharoṣṭhī Inscriptions discovered by Aurel Stein in Chinese Turkestan*, Oxford.
- Bronkhorst, J. 2011: *Buddhism in the Shadow of Brahmanism*, Leiden.
- Brough, J. 1962: *The Gāndhārī Dharmapada*, Oxford.
- Brugmann, K. 1904: *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*, Strassburg.
- Filliozat, J. 1948: *Fragments de Textes et de Magie*, Paris.
- Pischel, R. 1981: *A Grammar of the Prākṛit Language* (translated by Jhā, S.), Delhi.
- Mulius, K. 1988: *Langenscheidts Handwörterbuch Sanskrit-Deutsch*, Berlin.
- Roebuck, V.J. 2010: *The Dhammapada* (English translation from Pali version), London.
- Salomon, R. 1999: *Ancient Buddhist Scrolls from Gandhāra, The British Library Kharoṣṭhī Fragment*, London.
- Speijer, J.S. 1886: *Sanskrit Syntax*, repr. 1993, Delhi.
- Stein, M.A. 1907: *Ancient Khotan*, Vol. I Text, repr. in Peking, Oxford.
- Strauch, I. 2014: *Looking into water-pots and over a Buddhist scribe's shoulder – On the deposition and the use of manuscripts in early Buddhism* in: Asiatische Studien Vol. 68 Issue 3, 2014, De Gruyter.
- Szemerényi, O. 1990: *Einführung in die Vergleichende Sprachwissenschaft*, Darmstadt.
- Wackernagel, J. 1954: *Altindische Grammatik Band II, 2 Die Nominalsuffixe* von A. Debrunner, Göttingen.
- Whitney, W.D. 1885: *The Roots Verb-Forms and Primary Derivations of the Sanskrit Language*, repr. 1988, Delhi.
- 岩本裕1963: A book-review 書評 for Brough, J. *The Gāndhārī Dharmapada*, London, 1962 in: Essay of Indology インド学試論集, Kyoto.
- 金子民雄 2002: 西域 探検の世紀 東京・岩波書店
- 辻直四郎 1974: サンスクリット文法 東京・岩波全書
- 中村元 1978: ブッダの真理のことば・感興のことば 岩波文庫
- 1984: ブッダのことば スッタニパータ 岩波文庫
- 水野弘元 1968: パーリ語辞典 東京
- 山崎守一 2010: 沙門ブッダの成立 東京